

**國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース**

Vol.14 No.1  
 発行人 武田 秀章  
 編集人 大東 敬明  
 〒150-8440 東京都渋谷区東 4丁目10番28号  
 電話 (03) 5466-0104  
 FAX (03) 5466-9237

**日本文化研究所 令和二年度事業計画①  
 デジタル・ミュージアムの運営  
 および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信**

本プロジェクトは昨年度から三年の事業として開始されており、本年度が二年目となる。主たる内容として、平成二十一年度に本格的に運用を開始した「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://kamu.kokugakuin.ac.jp/DM/>)の円滑な運営をはかり、デジタル・ミュージアム上で公開する独自コンテンツの作成を行うといったことが挙げられる。なお、デジタル・ミュージアムについて、昨年末段階で三〇データベースを公開しており、公開項目の総数は七二、四五一件となっている。また日本の宗教文化について研究を進めながら、それを教えるための教材についても研究・作成し、あわせて国際的な発信を進める。

デジタル・ミュージアムの運営について、教育への活用を視野に入れながら、研究開発推進機構の各機関と有機的に連携して推進していく。また、これも各機関と連携しながら研究開発推進機構における研究成果や各種のデータベース等についてもデジタル化を進め、更に本学全体に

おける研究成果発信の一環として、学部・大学院で構築したデータベース等を横断的に公開することにも対応する。独自コンテンツの作成について、引き続き二十一世紀COEプログラム関連事業として構築した「Encyclopedia of Shinto (『神道事典』の英訳。以下EOS)の拡充を図る。日本文化研究所が蓄積してきた研究成果や学術資産についても整理しながらデジタル化し、これらを主としてインターネットを通して国際的に発信していく。そのために、昨年度中に日本文化研究所のウェブサイト構築・公開 (<https://www2.kokugakuin.ac.jp/oardicc/>)、またFacebook&twitterといったSNSでの情報発信も開始した。更に、神道と日本の宗教文化に関する情報を英語で発信するためのポータルサイトであるShinto Portal (<http://www2.kokugakuin.ac.jp/e-shinto/index.html>)も昨年度中に構築・公開した。加えて、本学の学術的な研究成果を国際的に発信していくために英文オンラインジャーナ

**目次**

- ◆ 日本文化研究所 令和二年度事業計画①  
「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」(星野靖) …… 1
- ◆ 日本文化研究所 令和二年度事業計画②  
「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」(武田幸也) …… 3
- ◆ 学術資料センター 令和二年度事業計画①  
「博物館収蔵品の資料化とデジタル公開に関する研究」(内川隆志) …… 4
- ◆ 学術資料センター 令和二年度事業計画②  
「神道関連資料の整理分析と神道史の再検討」(大東敬明) …… 5
- ◆ 校史・学術資産研究センター 令和二年度事業計画①  
「國學院大學における自校史研究とアーカイブの活用」(渡邊卓) …… 6
- ◆ 校史・学術資産研究センター 令和二年度事業計画②  
「國學院大學における学術資産研究の可視化」(渡邊卓) …… 7
- ◆ 研究開発推進センター 令和二年度事業計画①  
「研究開発推進センター研究事業」(宮本誉士) …… 8
- ◆ 研究開発推進センター 令和二年度事業計画②  
「二十一世紀研究教育計画委員会研究事業  
渋谷の都市形成と再開発に関する研究」(宮本誉士) …… 9
- ◆ 古事記学センター 令和二年度事業計画  
「古事記学の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ—」(渡邊卓) …… 10
- ◆ 國學院大學博物館 令和二年度事業計画  
「事業計画・人事一覽」 …… 11
- ◆ 彙報 …… 12
- ◆ 資料紹介「御社拝記」 …… 14

ル *Kokugakuin Japan Studies* を昨年度中に創刊し、本学専任教員が日本語で発表した論文三本を英訳して公開した (<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/ijcc/ken-nicjibunkenkankobutsu/kjs-01-202002>)。

日本の宗教文化についての研究と教材を国際的に発信していくことについて、引き続きデジタル・ミュージアムの機能を、広く大学教育・宗教文化教育に活用していくための取り組みを行い、ユーザーにとつての使い勝手の向上をはかる。研究資産を教材として展開させていくにあたって、平成二十三年に宗教文化士制度の運営を目的として発足した「宗教文化教育推進センター」と連携

して事業を進める。教材開発については、これに焦点を合わせて意見交換するための研究会を開催してきており、加えて昨年度は公開のワークショップとして「生活の中で直面する世界の宗教文化—食・服装・忌避などへの理解」を開催した。また、日本の宗教文化についての英語教材を開発し、海外の研究者に利用してもらえようという形で発信していく。これについては、本年度も引き続き、平成三十年度に採択された科学研究費基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」(18H00615)研究代表者・平藤喜久子) 事業とも協力しながらプロジェクトを進めていく。

一、デジタル・ミュージアムの運営  
デジタル・ミュージアムの運営について、本プロジェクト担当者、研究開発推進機構の各機関のデータベース担当者、および図書館、広報課、情報システム課、ソフト提供会社の担当者からなる「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」を組織し、システム全体の円滑な運営を図る。同ワーキンググループにおいて、運用上の課題点を共有して改善を図り、利用者の利便性を高めていくための工夫や、スマートフォン対応を含めて教材として活用するための方策などについて議論する。アクセス数(二〇一九年は年間で延べ八八六、一七三件であった)について定期的に共有・分析し、海外からの利用状況についても把握しながら、利用状況の改善を試みる。またデータベースの新規追加も随時受け付ける。

二、デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築  
①神道と日本の宗教文化に関するポータルサイトの拡充

現在、デジタル・ミュージアム上において、日本文化研究所の研究成果としていくつかの英語のデータベースを構築し、公開している。主要なものとしては、まず前述のEOSがあり、EOSに附属する形で初学者用の神道入門ウェブサイトの「Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide 図説による神道入門」と「Chronological Supplement 年表」を公開している。他に双方向論文翻訳データベースや、神道基本用語集などを公開している。また、旧日本文化研究所時代に作成した日本

の宗教文化に関する英語論文などもウェブ上で公開している(例えば Contemporary Papers on Japanese Religion(シリーズ2))、 Matsuri Festival and Rite in Japanese Life, New Religions, Folk Beliefs in Modern Japan, Kamiの四集が公開されている)。昨年度に運用を開始したShinto Portalサイトはこれら既存のコンテンツに対して、一覧性を備えたナビゲーションを提供するものである。使い勝手を向上させながら、神道と日本の宗教文化を学ぶ際に有用なウェブコンテンツについての情報を収集してリンクを拡充し、国内外の学生が神道を学ぶ際に活用できるものとすることを目指す。また、本事業において宗教文化教育のために作成した教材についても、ポータルサイトとリンクさせる。

②過去の研究資産の整理・公開

昨年度に運用を開始した日本文化研究所のウェブサイトにおいて、日本文化研究所の過去の研究成果をデジタル化して公開していく。二〇一七年度に研究開発推進機構は発足十周年を迎えたが、それ以前の旧日本文化研究所の五〇年間を合わせ、遡って情報を集約して整理し、過去の催事や刊行物の一元的なリスト、年表などを作成する。これに合わせて、過去の催事の写真や動画なども集約し、アクセスしやすいような形で整理していく。

③研究成果の国際的発信

本学の研究成果を国際的に発信することを目的として昨年度創刊した英文のオンラインジャーナル *Kokugakuin Japan Studies* を引き続き編集・発行する。創刊号同様に、國學院大學の専任教員による日本文

化研究に関する論文の英訳を掲載する。本学から刊行されている学術雑誌のなかから、日本文化研究に関するものを三本程度選定し、これらを英語に翻訳し、編集してオンラインで公開する。

神道関連で必要とされる教材について検討し、教材として活用できる動画面素材の作成などを進めていく。これに関連して、宗教文化教育の教材研究のための研究会を開催する。広く国内外の研究者たちから事例報告を受け、議論を積み重ねるのに加え、より広く一般社会への還元も念頭に置いており、公開の研究会の開催も検討している。

三、宗教文化教育の教材研究の国際的展開

①宗教文化教育の教材研究・作成

研究成果の教育への還元ということを念頭に置きながら、「宗教文化教育推進センター」と協力して、宗教文化教育の教授法と教材の研究を進め、また教材作成を行っていく。現在は「世界遺産と宗教文化」、「映画と宗教文化」、「博物館と宗教文化」といったデータベースを公開しているが、それらの拡充を図ると共に、新たなデータベースの追加について議論し、設計・公開していく。また地図上に情報を表示させる形でのデータベースについては、以前からスマートフォンアプリ「ロケスマ」上での公開を行っており、これについても更なる拡充を検討する。

③教材動画のシステム構築  
以前より日本文化研究所では、現地調査の際に動画を撮影したり、あるいは主催した催事の記録動画を作成したりしてきており、これらを整理しながらデータベース化を進めている。また、EOSにも百件を超す動画が含まれている。これらの動画資産と、新たに作成する教材用の動画などを含めて、国内外から広く利用してもらえよう公開のためのシステムを引き続き検討している。

また、一九九五年度から二〇一五年度にかけて断続的に行われた学生宗教意識調査について、新たにオンラインで本年度分の調査を実施する予定である。この結果をまとめるとともに、既に刊行されている同調査の諸成果を編集して教材を作成することも検討している。

②神道と日本の宗教文化に関する教材の研究と作成

四、日本文化研究所国際研究フォーラムについて

日本文化研究所は、研究所全体での催事として、毎年国際研究フォーラムを開催しており、昨年度は神道・国学研究部門が主体となつて、日本文化研究所主催・古事記学センター共催で「二十一世紀における国学研究の新展開―国際的・学際的な研究発信の可能性を探る―」を開催した。本年度中にこの報告書を刊行する。

本年度の交際研究フォーラムについて、若手研究者による研究成果の国際的発信を促すことを念頭に置いて英語発表を中心としたワークショップ形式で開催することを計画している。

科学研究費基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究―事業で進めている海外の日本宗教関係の授業におけるニーズ調査を踏まえ、特に

## 日本文化研究所 令和二年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と 国学史像の再構築

### 事業の目的と概要

平成三十年年度より三ヶ年におたって実施している本事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものであり、本年度で最終年度を迎えることとなる。本事業の内容は、以下の三つの具体的な目標によって構成される。

(一) 国学に関する学説史・研究史の整理を行い、最新の研究成果を反映した国学史像を打ち立て、それを一般社会に向けて発信する。

このため、まず最新の国学史像を構築するための通史形式による国学の概説書を作成し、出版することで広く発信する予定である。前年度は策定した執筆案を基に各担当者に依頼を行っている。

(二) 以上の作業と連動して、昨年度「国学・神道関係人物研究情報データベース」(<http://kamu.kokugakuin.ac.jp/jmk/>)と改称したデータベースを拡充し、その修正・管理を行うにつつ、近世中期から明治初期までの国学・神道関係人物を対象とするデータを適宜追加している。また、関連する資料の調査のため、岐阜県・各務原市、内藤記念くすり博物館への出張調査を行った。このデータベースは国学研究者にとっての有益な研究のツールとなるのみならず、作業の過程における

研究史整理や人物情報の調査の結果を(一)に反映させている。

(三) これまでの事業で構築してきた国学研究ネットワークを拡張する。具体的には定例の国学研究會・社家文書研究会を開催しつつ、学内外の国学研究者を招いて最新線の研究状況に関する公開レクチャーを開催する。前年度は計三回開催した。さらに日英両言語で運営する双方向型のウェブフォーラムとして、フェイスブック・グループの「国学・神道・日本宗教フォーラム」を立ち上げており、今後国学・神道研究の情報や、研究所の過去の研究成果をグローバル規模で発信していく。これらの公開レクチャーやウェブフォーラムにより、国内の国学研究の最新状況や、グローバルな国学研究の状況を知ることができ、そこで得られた知見も(一)に反映される。

また、昨年度は、国際研究フォーラム「二十一世紀における国学研究の展開―国際的・学際的な研究発信の可能性を探る―」を日本文化研究所主催・古事記学センター共催で開催した。本フォーラムでは、一次資料に即した実証研究が大きく進展した国学研究の学術的な意義づけの再検討がなされ、国内外の九名の研究者による活発な発表・討論が行われた。

### 本年度の事業計画 一・近世・近代国学に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築

(一) 前年度に行われた近世・近代の国学に関する研究史・学説史の整理を踏まえ、従来の思想的な国学史像の問題点を洗い出した上で、最新の研究成果を反映した国学史像の基盤を構築する。

(二) 公開レクチャーも参照しながら、二十一世紀に入ってから的一次資料に基づく実証的な国学研究の成果に依拠しつつ、従来の問題点を再検討し、新たな国学史像を具体的にまとめていく。国学史像の案は後述の国学研究會や「国学・神道・日本宗教フォーラム」において発表し、検討する。

(三) 前年度に策定した執筆担当案にしたがい、(二)においてまとめられた国学史像に基づき、国学の概説書の執筆を開始し、本年度中の出版を予定する。

(四) 関連する国学・神道関係人物の一次資料の調査とデータベース上の国学・神道関係人物の基礎的データ収集のため、中部・東海地方の資料館を対象とした出張を行う。

### 二・国学・神道関係人物データベースの拡充

(一) 前年度に引き続き、「國學院大學デジタル・ミュージアム」上の「国学・神道関係人物研究情報データベース」の修正・管理を行うにつつ、近世中期から明治初年までの国学・神道関係人物を対象として、先行の目録類や研究を再調査・確認するこ

とで、「国学関連人物データベース」における当該項目を増補する。これにより国学研究の有益なツールとしての機能を果たす。

(二) これらの調査に基づき、データベースの項目を作成し、順次アップロードしていく。

### 三・国学研究ネットワークの拡張

(一) 月に二、三回を基本として、定例の国学研究會・社家文書研究会を開催する。国学研究會では学内外から国学・神道を中心とする日本研究における若手研究者の参加を募り、各自の研究発表を行っていく。また、前述一―(一)―(二)における研究成果の発表と検討も併せて行う。社家文書研究会においては近世・近代の国学・神道に関する一次史料の読解を行い、参加者の史料読解能力の向上も目指す。

(二) 「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」として、学内外の国学研究者を招き、それぞれの専門分野の見地から、国学研究の最新状況に関する講演を行ってもらう。このレクチャーは一般に向けて公開し、またそこで得られた知見を上記の学説史・研究史整理と国学史像の再構築に反映させていく。

(三) 前年度に開設した「国学・神道・日本宗教フォーラム」の管理と運営を行う。SNSの機能も活用しながら国内の国学・神道研究に関する情報を日英両言語で発信する。

(四) 過去の日本文化研究所における国学・神道研究の成果をアーカイブ化し、上記のウェブフォーラムなどを通じて国内外に発信する。

(文責：武田幸也)

## 学術資料センター 令和二年度事業計画① 博物館収蔵品の資料化とデジタル公開に関する研究

### 一・事業の目的

昭和三(一九二八)年に考古学標本室を設置して以来、國學院大學博物館が収集してきた考古資料・民俗資料は、既に十万点以上に及び、列品台帳の登録件数も六〇〇〇件を超えている。また、現在では、これらの有形文化財のみならず、かつて本学に関係した研究者らが遺した学術資料・館史資料・画像資料などの歴史資料や、新たに浮世絵等の絵画資料なども取り扱うようになってきた。

本事業は、國學院大學博物館所蔵資料の調査研究を基盤とする大学ミュージアム活動の中核であり、旧考古学資料館より継続している考古・民俗資料研究、旧日本文化研究所「学術フロンティア事業」以来の資料デジタル化研究、旧伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクトを引き継ぎ祭祀考古学研究、同「國學院の学術遺産に見るモノと心」の一部を引き継ぐ歴史資料研究を網羅する大規模なものである。令和元(二〇一九)年度まで、三次元資料と二次元資料を取り扱う二部門を立てていたが、同じ博物館資料を横断的に活用することを眼目として、総合的な研究プロジェクトを実施することとした。

### 二・事業の概要

本事業は、次の五項目に掲げたとおり、國學院大學博物館が所蔵する文化財の整理、研究、活用に資する成果を目的とする事業を展開する。

① 収集・保存・管理事業として、台帳の増補と、特定資料目録の作成(古鏡・埴輪・古瓦・板碑・陶磁器・民具・歴史資料など)を進め、列品保存・管理システムの構築、改善を図り、保存環境整備と重要資料の修理・演示具製作を行う。収蔵品の不足を補う中長期的な資料収集・修理計画を策定・推進する。

② 重要資料の資料化・デジタル化と調査研究事業では、学史的な重要館蔵資料や収蔵品の再整理、目録編修、纏まった資料群の調査研究を推進し、学術情報を逐次記録・デジタル化を実施する。さらに収蔵品の科学的調査・分析等を実施することによって将来的な『重要資料学術調査報告書』の刊行に備える。

③ テーマ研究では、本学における考古学・民俗学・歴史学研究の歩みと、重要館蔵資料の学術的位置付けについて、館蔵資料の学術的な再評価を図るため必要なフィールド調査を伴う調査研究を実施する。加えて、祭祀考古学会と連携した祭祀遺跡データベースの構築(当面は科研「出ユーラシアの統合的人類史学」

との連携で推進)と、博物館創立百周年を旨とした館史の編纂に取り組み。

④ 研究成果公開事業では、デジタル画像を伴う特定資料目録を作成し、WEB上で公開する。『中世和鏡の基礎的研究Ⅲ』・『漢代物質文化資料図説(邦訳)』・『柴田常恵資料集(仮)』など、館蔵文化財に関する書籍を刊行。研究成果全般については、國學院大學博物館における展示活動・イベント等による成果公開を行う。

⑤ 学芸職員実践教育では、学部・大学院と連携し、博物館業務を担う臨時雇員に学生等を任用し、実践業務に当たらせることで、アカデミックキャリアの形成に資したい。具体的な業務を実践することで考古・民俗・歴史学の専攻生を育成し、専門職へのキャリアデザインを提供する。また、学部・大学院の考古学実習成果の公開や、山梨県埋文センター・帝京大学文化財研究所等の協力を得た実地教育も推進する。

### 三・本年度の事業計画

① ⑤に示した事業は、全期間を通じて実施し、順次成果を公開してゆくものであるが、②事業で特に本年度から重点的に着手する事業として、先史時代(縄文土器・土偶・石棒等)、原史(祭祀遺物・埴輪・古鏡)、有史(古瓦・陶磁器・和鏡・石製塔婆)、外国(鞍山中学校旧蔵資料)、民俗資料、研究者個人資料(大場・樋口・神林・齊藤・柳田・

吉田資料等)のデータベース化と公開等があげられる。その内、未刊行の吉田恵二資料『漢代物質文化資料図説(訳稿)』については、原著者の中国国家博物館研究館員である孫機氏と、中国社会科学院考古研究所所長の朱岩石氏よりご協力を得て、令和四(二〇二二)年度の邦訳書を刊行する計画を進めている。成果公開事業としては、國學院大學博物館企画展示として「大場磐雄一人と学問―展を予定している。

③では、「神社境内祭祀遺跡の研究」として、「神社」の成立過程を明らかにする取り組みの一部であり、関係する重要館蔵資料(洗田遺跡・建鉦山遺跡出土資料ほか)の資料化と併せ、車の両輪として実施するものである。その内、兵庫県保久良神社については、当館創立者の樋口清之が最初に神道考古学的調査を実施した経緯がある。具体的な調査の実施に関しては、神戸市教育委員会の須藤宏学芸員にご協力を頂き、境内遺跡出土資料の調査を行う予定である。但し、現状では、今後調査計画の調整を行う中で、福島県建鉦山遺跡等の調査を優先して実施する可能性があることを付言しておく。また、長く本学がフィールドとしてきた伊豆半島・伊豆諸島の信仰史を跡付ける「伊豆地域の宗教考古学的研究」調査として古代・中世三島信仰の中核をなした三宅島における富賀神社・御笏神社・薬師堂など、主要な社寺の文化財調査を予定している。

(文責・内川隆志)

## 学術資料センター 令和二年度事業計画② 神道関連資料の整理分析と神道史の再検討

### 事業目的・概要

「神道関連資料の整理分析と神道史の再検討」(令和二年度～四年度)は、学術資料センター(神道資料館部門)が所管する資料の再整理や、宮地直一旧蔵資料をはじめとする諸資料群の整理を行うこと、本部門がこれまで行ってきた研究事業で得られた成果や、本学が所蔵する学術資産を活用し、それらを祭祀・祭礼・神社を中心とした神道史の中に位置づけることを目的とするものである。

ここで得られた成果は、本センターの刊行物、國學院大學博物館での展示、Twitter、Facebookほかを通して、本学の学生及び社会に還元する。

このように本研究事業は國學院大學博物館の事業と密接に結びついており、協働して行うことも多い。

### 前年度の成果 刊行物

『祓の信仰と系譜』(令和元年六月、在庫なし)、『四季の祭り』と神道の歴史』(令和二年二月)を刊行した。このほか、企画展「大嘗祭」の展示図録でも研究成果を公けしている。

神道祭祀を考える上で、祓は祭祀とともにその中核にある儀礼である。また、祓に用いられた詞やその注釈は、神道思想と深く関わってき

た。『祓の信仰と系譜』は、その祓の歴史的展開を概観しようとしたものである。同書には、岡田莊司

「神道と祓の信仰」、笹生衛「祓と人形―その系譜と変遷―」、塩川哲朗・木村大樹「古代国家の大祓」、加瀬直弥「古代の神社と神職にとつての祓」、大東敬明「中世における中臣祓の本文と注釈」、吉永博彰「近世の祓の儀礼と用具」、高野裕基「近世・近代の大祓詞と中臣祓研究」、鈴木聡子「現代の神社年中行事にみる祓の儀礼」を収めた。

『四季の祭り』と神道の歴史』は、日本の四季の祭りを神道史の中に位置づけたものであり、岡田莊司「神道と祭祀」、笹生衛「四季の祭りの起源―自然環境と稲作と古代の神・祭祀―」、大東敬明「祭りの季節」、木村大樹「天皇・朝廷の祭り」、塩川哲朗「伊勢神宮における四季の祭り」、鈴木聡子「神社の祭り―二十二社を中心に―」、加瀬直弥「中世神社の祭り」、吉永博彰「近現代の神社と祭り」を収めた。

### 展示・行事

國學院大學博物館とともに、左記の展示・行事を行った。

#### 【企画展】

・「大嘗祭」(令和元年十一月一日～十二月二十二日)

#### 【春の特別列品】

・「國學院大學図書館の名品」神の新たな物語―熊野と八幡の縁起

〜(令和二年三月二十日～四月七日)

#### 【特集展示】

・「即位礼」(平成三十一年四月二十七日～令和元年五月二十六日)

・「高倉家調進控―近世の上皇さまの御召し物―」(令和元年六月二十九日～七月二十一日)

・「高倉家調進控 文様絵形」江戸時代のデザイン帖」(令和元年七月二十三日～九月二十九日)

・「即位礼」Part2(令和元年十月一日～十二月二十二日)

このうち、「大嘗祭」「即位礼」「即位礼」Part2については、『研究開発推進機構ニュース』二十六号(令和二年二月)に詳述した。

「神の新たな物語―熊野と八幡の縁起―」は、國學院大學図書館が所蔵する資料(一部寄託資料を含む)の中から、日本神話の中世的な変容、熊野権現や八幡神の縁起に関わるものを展示した。縁起とは、社寺の由来や霊験を説く物語のことである。なお、本展示には、本学教育開発推進機構・新井大祐准教授の協力を得た。

主な展示資料は次の通りである。

- ・「神皇正統記」「室町時代中期」(重要文化財)
- ・「蟻通明神の縁起」「江戸時代前期」
- ・河野本『神道集』(河野省三博士記念文庫)「江戸時代中期」(寄託資料)
- ・「熊野縁起」「江戸時代前期」
- ・「八幡の本地」「寛文・延宝頃」

また、渋谷フクラス一階にある観

光支援施設「shibuya-san」では、「Traditional shrine tour in Shibuya 神社ツアー」(令和元年十二月二十八日～令和二年一月十四日)が行われた。これに関連した同施設での小さな展示や國學院大學博物館での展示解説に、本部門も協力した。

### 本年度の事業計画

本年度は、所管資料の再整理・分析、宮地直一旧蔵資料などの整理作業を進める予定である。しかし、新型コロナウイルス感染症対策のため、四月～六月は在宅勤務が主となった。

國學院大學博物館も休館となり、同館では、この期間中、Twitter、Facebookを通じて本センター所管資料を紹介する取り組みを始めた。この企画は、家で楽しみながら学べる取り組みを行っている全国のミュージアム同士が手を組んだ「うちミュージアム」にも参加している。

本学博物館の企画では、これまで國學院大學図書館・デジタルライブラリー上で公開してきた「稲荷神社 両御霊神社私祭之図」「十四日乃祇苑会」(祇園祭礼絵巻)などの祭礼絵巻や、高倉家旧蔵資料(調進控、文様絵形)といった資料も取り上げられており、本部門もこれに協力している。

なお、本年度、本研究事業の一環として、同館で企画展「What SHINTO is: ー日本の神と祭りー」を行う予定であったが、次年度以降に延期となった。

(文責・大東敬明)

## 校史・学術資産研究センター 令和二年度事業計画① 國學院大學における自校史研究とアーカイヴの活用

### 前年度の研究成果

平成二十九年度から令和元年度まで、校史・学術資産研究センター校史研究部門では、「國學院大學における大学アーカイヴズ体制の基盤整備」研究事業を推進した。本研究事業では、先行研究事業を継承して校史資料課から引き継いだ資料の調査・研究・整理を行い、最終年度にあたる令和元年度には、その成果として「校史資料簡易目録」を完成させた。併せて本研究事業では本学年史類のデジタル化を行うことで、校史資料アーカイヴ体制の基盤を整備した。

他方、同年度には、研究成果の社会・地域還元として本学博物館において企画展「和歌万華鏡―万葉集から折口信夫まで―」(四月二十七日～六月二十三日)、企画展「有栖川宮家・高松宮家ゆかりの新収蔵品」(八月三十一日～十月二十七日)、特集展示「三条教則と教派神道」(五月二十八日～六月二十三日)、特集展示「学徒出陣と國學院大學―出陣学徒のこぼれ―」(八月三十一日～十月二十七日)を開催した。

### 新規研究事業の目的

校史研究部門では、令和二年度から新たに「國學院大學における自校

史研究とアーカイヴの活用」として研究事業を推進する。

本研究事業では、「校史資料簡易目録」およびデジタル化した年史などのアーカイヴを活用し、校史資料の調査・研究を行うことで、所蔵資料を自校史の中へ改めて位置付ける。これにより、自校史の再検討を行うとともに、校史アーカイヴ体制の整備とそれを活用した調査・研究・教育を推進する。

その目的は、来たる國學院設立百三十年や創立百四十、百五十周年に向けた年史編纂に備えることにある。

そのため、既存の年史である『國學院大學八十五年史』並びに『國學院大學八十五年史史料篇』、『國學院大學百年史』上・下巻の編纂において引用および活用された資料の原資料の確認を行う。その際、先行事業において作成した「校史資料簡易目録」を用いて調査を行うことで、同目録に搭載された資料の体系的理解につなげる。また、校史資料の長期保存や公開・閲覧を視野に入れたデジタル化を継続して実施する。

### 具体的実施計画

本研究事業は、事業期間全体を通して、先行事業により作成した「校

史資料簡易目録」の更なる充実を図るとともに、年史編纂を視野に入れたアーカイヴの活用を進めることを基軸として下記の事業を展開する。

#### ①校史資料の整備

本研究事業の基軸となる年史編纂に向けた準備としては、先行事業により作成した「校史資料簡易目録」の更なる充実を目指して日常的に校史資料の整理を行うとともに、年史編纂を目的として同目録を活用した実践的な整理作業へと移行する。また、校史資料の長期保存や公開・閲覧も視野に入れた校史資料のデジタル化を継続して実施する。

実施期間の全年度共通の事業としては、各年次の調査研究と並行して本学戦後史の年譜作成を行う。具体的には「校史資料簡易目録」登載の資料の他、『國學院大學概要』や『学報』などを用いて、未だ詳細に把握できていない本学の戦後史を把握できる年譜を作成する。また、各年次における資料整理・調査の結果と校史デジタルアーカイヴを連動させることで、これまでに実施した年史や写真、音声テープなどのデジタル化のみならず、本学が持つ固有の価値を評価する上で重要と考えられる「原資料」をデジタル化し、公開に向けた準備を進める。

#### ②資料寄贈および問い合わせ対応

日常の業務として、近年増加傾向にある院友をはじめとする学内外からの資料寄贈や校史関連事項への問い合わせに適宜対応しつつ、本センターのレファレンス機能の更

なる充実を目指す。

#### ③研究成果の公開

これらの作業において得た新たな知見は、本学博物館における展示において汎く学内外へ発信する。本研究の成果は、『國學院大學校史・学術資産研究』や『校史』といった本センターの機関誌などや本学博物館での展示を通じて公開していく。

また、平成三十年度に開始した『学報』連載記事「学問の道」を通して、院友および社会一般への自校史の発信も引き続き行う。

#### ④自校史テキストの改訂

共通教育プログラム「神道と文化」のサブテキストである『國學院大學の歴史』の改訂作業を通して自校史教育の現場へと還元する。改訂作業では、これまで実施してきた当該サブテキストの学生アンケートを分析し、より良い改訂への参考とする。

#### 本年度の事業計画

以上の研究事業計画を踏まえ、初年度となる令和二年度には、既存の年史である『國學院大學八十五年史』並びに『國學院大學八十五年史史料篇』、『國學院大學百年史』上・下巻において引用および活用された資料の原資料を確認する作業を開始する。この作業では「校史資料簡易目録」を用いて調査を行い、同時に同目録に搭載された資料の体系的理解につなげる。また、本学戦後史年譜の作成も本年度より開始する。

(文責・渡邊 卓)

## 校史・学術資産研究センター 令和二年度事業計画② 國學院大學における学術資産研究の可視化

### 研究事業の目的と概要

校史・学術資産研究センター学術資産研究部門では、平成三十年から令和二年度まで「國學院大學における学術資産研究の可視化」研究事業を推進している。

本研究事業は、本センター研究事業のうち、「本学所蔵の学術資産に関する研究」、「資料の収集、整理及び展示」、「折口博士記念古代研究所並びに河野博士記念室及び武田博士記念室に関する資料の研究」の分野を担いつつ、平成二十九年に策定された「二十一世紀研究教育計画(第四次)」に示される「校史および貴重史料の整備と、それを活用した調査・研究・教育の推進」、「学術資産の活用」に基づき、研究事業を推進することを目的とする。

具体的には、國學院大學図書館と連携しつつ、本学が有する学術資産を研究し、その価値を見出す。また、貴重書以外の特殊文庫にも注目して、河野省三、武田祐吉、宮地直一をはじめとし、本学にゆかりの深い人物が所蔵していた資料について、①資料そのものの価値、②伝来、③本学との関わり等の3点から研究することにより、それらがどのように研究利用され、継承され、活用されてきたのかを明らかにする。これにより学術資産を校史及び研究史に結び付ける試みを行う。

本事業は、本学の学術資産を調査・研究し、学術資産の研究を深める「高度化」とともに、上記で用いた資料および研究成果を本学図書館デジタルライブラリー、本学博物館において公開することで「可視化」する。この学術資産研究の「高度化」と、その成果の「可視化」が本事業の特色となる。

これらは、本学の学術資産研究及びその研究成果(「本学固有の価値」)を内外に発信するための基盤整備の一環であり、研究者による高度な学術資産の活用と本学の教育活動での活用といった、すそ野の広い成果が期待され、研究と教育とを有機的に結び付けることが可能となる。

以上の活動を通して得られた新たな知見は、本センター紀要である『國學院大學 校史・学術資産研究』や一般向け冊子である『校史』に発表するとともに、自校史教育の場での活用を試みる。また、本学博物館における展示を通して、学術資産及び研究成果を発信し、校地・渋谷をはじめとする社会へ還元する。

### 前年度の研究成果

本研究部門における学術資産研究の成果の社会還元は、本学図書館デジタルライブラリーや本学博物館展示を通して実施している。

令和元年度は、『万葉集』、『新古今和歌集』、『古今和歌集』などの和歌集をはじめ、『土御門家記録』、『日本城郭図』、神道資料として『三社託宣』、『吉田斎場記』、令和二年度に撰上千三百年となる『日本書紀』関連資料として『日本書紀神代卷抄』、『信西日本記鈔』、『日本書紀』といった典籍・資料に関する解説や書誌、写真データを本学図書館との協働により、デジタルライブラリーに掲載した。

また、同年度は、本学図書館デジタルライブラリーへの解題を作成しつつ、前年度から進めてきた「和歌」「中世」「近世」に関わる学術資産の調査・研究成果に基づき、本学博物館において企画展「和歌万華鏡―万葉集から折口信夫まで―」(四月二十七日～六月二十三日)(図録作成)、特集展示「覇者たちの中世」(六月二十九日～八月二十五日)、特集展示「吉田家伝来文書にみる花押・印判」(十一月二十六日～十二月二十二日)を開催した。

この他、同年度五月からは、『國學院大學学報』連載記事「未来につながる 学術資産研究ノート」が開始した。この連載の趣旨は①本学所蔵の学術資料を紹介し、研究、校史、学術資産への理解促進をはかること、②教育研究、ひいては本学のブランド力向上に資すること、にあり、本センターにおいては、本学図書館および広報課との職協働により本部門の研究成果を院友、社会一般へと還元するための事業として位置付けていく。

### 本年度の事業計画

事業最終年度となる本年度には、引き続きデジタルライブラリーの充実を図るとともに、同年度に成立千三百年を迎える『日本書紀』関連展示を本機構古事記学センターとの協働により行う。そして、昨年度までに実施した中世文書・近世文書に関わる特集展示の成果を反映させた『國學院の史学(仮)』を事業成果刊行物として作成・刊行する。同書は、本学の国史研究の歴史を主要な研究者の業績を踏まえて解説するとともに、本学所蔵の貴重史料について解説する。加えて歴史文書の取り扱い方法に関する項目を付すことで、本学の国史研究の歴史や貴重史料の概要を知るのみならず、文献調査方法の基礎知識を教授することができるテキストとしての性格も付加する。

これにより、本研究部門における近年の課題であった学内教員や学生における貴重史料の活用を促すとともに、学内外における本学所蔵貴重史料の情報発信の一端を担うことができると考える。

なお、継続的に調査を進めている特殊文庫や本学図書館所蔵の「吉田家文書」に関する新たな知見については、速報的に本学博物館において特集展示を開催するとともに、研究者や専門家に向けた成果公開としては、従前の通り『國學院大學校史・学術資産研究』において行う。

(文責：渡邊 卓)

## 研究開発推進センター 令和二年度事業計画① 研究開発推進センター研究事業

### 事業の目的

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会の策定した二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における研究事業を継承し、「建学の精神」に基づく国学的研究手法によって神道・日本文化の研究をさらに発展させることを目的として、院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄附金等の外部資金を基に実施される。

### 前年度の成果

前年度の成果としては、平成二十八年年度から実施してきた「近代の神道及び神職・国学者に関する研究」について、関連資料の調査・研究、研究開発推進センター研究会における課題の共有・検討、成果刊行物の企画・立案、執筆依頼などを進め、学内外の三十一人の研究者から当該テーマに係る原稿を執筆頂き、國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『近代の神道と社会』（弘文堂、令和二年二月）を刊行した。

また、霧島神宮からの依頼に基づき、平成二十八年年度から実施した「霧島神宮の研究」については、研究開発推進センターのマネジメント、霧島神宮誌編集委員会及び事務局の協同作業による調査・研究の成果として、霧島神宮の創祀から現在

に至るまでの歴史（第一部）、祭祀・社殿・文化財・宝物・境内地・崇敬団体の現状など（第二部）をまとめ、霧島神宮誌編集委員会編「霧島神宮誌」（霧島神宮、令和元年九月）を刊行した。

北海道神宮からの依頼に基づき、平成二十九年度から実施した「北海道神宮の研究」については、継続的に進めてきた調査・研究の成果として、当初の予定通り、平成三十一年度（令和元年度）の北海道神宮御鎮齋百五十年及び第四百四十回札幌まつりを記念して、北海道神宮社務所編・國學院大學研究開発推進センター編集協力『北海道神宮と札幌まつりの歴史』（北海道神宮社務所、令和元年九月）を刊行した。

乃木神社からの依頼に基づき、令和元年度から実施した「乃木神社の研究」については、令和五年度の御鎮座百年を記念して刊行する『乃木神社御鎮座之記（仮）』の編纂を目途に、資料の調査・検討を進めた。

また、「伝統文化・神社・地域と共存社会の研究」の推進に関して、東日本大震災被災地復興に関する調査を行うとともに、研究事業の再検討を目途として、令和元年度共存学シンポジウム「グローバル」世界のビジョンを探る、「共存社会」の構築に向けて（令和二年二月十八日）を開催した。

学外研究機関との連携事業につ

いては、神道文化会第二十一回公開講演会「皇位継承儀礼を考える」（令和元年六月二十二日）、明治聖徳記念学会公開シンポジウム「戦後の神社神道」（令和元年七月十三日）をそれぞれ共催事業として開催した。

また、本事業に関する進捗状況や課題の共有・検討などを行うため、本センターの構成員を中心に適宜研究開発推進センター研究会を実施するとともに、成果刊行物として、『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十四号（令和二年三月）を刊行した。

私立大学研究ブランディング事業「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信の実務的運営については、年次計画に基づく事業推進、運営を実施した（同事業の成果報告、本年度の事業計画等については、本紙十頁参照）。

### 本年度の事業計画

本年度は、(一) 幕末維新期の神道・国学に関する研究、(二) 神道・国学に関する学内資料の調査・研究、(三) 伝統文化・神社・地域と共存社会の研究、(四) 私立大学研究ブランディング事業「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信の継続事業推進のための実務的運営、(五) 乃木神社の研究、(六) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化、(七) 研究開発推進センター研究会の実施、(八) 『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』の刊行、(九) 地域マ

進」の各事業を実施する予定である。

(一) については、本センターにおける神道・神社関係資料の研究、「近代の神道及び神職・国学者に関する研究」等の成果を基盤として、前近代から近代に移行する幕末維新期の社会的背景を踏まえながら調査研究を行い、近代日本の起点となる当該期の神道及び国学の諸相を明らかにすることを目的とする。本年度は、関連資料の調査研究を行うとともに、適宜、研究会等を開催して議論を深化させていく。

(二) については、本学図書館、各学部、研究開発推進機構所蔵の神道・国学関連資料についての調査・研究を実施するものであり、(三) については、伝統文化や神社と地域との関係性に着目し、「共存社会の構築」に関する研究を実施する。(四) については、大学の特別推進事業として、私立大学研究ブランディング事業の申請時における計画に従い、事業推進、円滑な運営を行う。(五) については、乃木神社関係資料の調査・検討を進め、同神社に関する研究を推進する。(六) については、本学と関係の深い国内外の研究機関と連携する研究交流企画の推進、(七) については、本事業に関する課題の共有、議論の深化を目途に、研究開発推進センター研究会を実施する。そして、(八) については、『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十五号（令和三年三月）の刊行、(九) については、「地域マネジメント研究プロジェクト」を推進する予定である。

(文責：宮本誉士)

## 研究開発推進センター 令和二年度事業計画② 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 渋谷の都市形成と再開発に関する研究

### 事業の目的

本事業は、これまで実施してきた「渋谷学研究会」の研究成果を基に、現在進行中の渋谷駅前再開発事業を視野に入れながら、「渋谷の都市形成と再開発」をテーマとして資料を収集・整理し、総合的かつ学際的に検討するとともに、「共存社会の構築」を考えることを目的とする。

本学が立地する東京・渋谷を研究对象とする「渋谷学」は、「渋谷を科学する」ことの学問的意義を問いつながり、研究成果を地域・社会・教育へと還元する方途を探ってきたが、本事業においては、特に渋谷駅前地域の商業施設や商店街、渋谷川、さらには広域渋谷圏と称される地域(原宿駅、表参道駅、恵比寿駅、代官山駅周辺)等を対象として当該テーマに係る調査・研究を行い、公開研究会、シンポジウム、刊行物などによる成果公開を実施していく。

### 前年度の成果と本年度の事業計画

前年度は、平成三十一年度に引き続き、歴史学・地理学・民俗学・経済学・宗教学等の各学問領域における横断的研究の基盤となる、渋谷の都市形成と再開発に関する資料の把握及び収集・整理を実施した。具体的には、國學院大學図書館をはじめ、東京都渋谷区立中央図書館、東京都立中央図書館、国立国会図書館等の

所蔵資料の調査を行い、当該テーマに関する資料・図書・論文の複写、渋谷関係資料目録の作成等を実施した。また、渋谷の都市形成過程を時系列で把握することを目的として、『新修渋谷区史』、『渋谷区議会史』などの各種資料に基づき、「渋谷年表(仮)」の作成を進めた。その他、現在進行中の渋谷駅前再開発事業による変化を視覚的に捉えるべく、渋谷川沿いから渋谷駅前、地下化前の東急東横線の渋谷駅、旧渋谷P.A.R.C.O、旧東急プラザ渋谷店、渋谷中央街などの地域を記録写真として撮影する「渋谷定点観測」を実施した。

また、本事業の成果刊行物として、『ブックレット渋谷学02』(令和二年二月)を編集・刊行し、調査・研究の成果を社会還元した。第一部講演編には、平成三十一年度渋谷学研究会の記録として、「明治神宮と表参道・渋谷の百年―「伝統」と「未来」を考える―」(平成三十一年三月十一日開催)、「銭湯と渋谷―移住者の都市形成史―」(平成三十一年二月二十三日開催)の内容を収録した。前者は、今泉宜子氏(明治神宮国際神道文化研究所)による講演の記録であり、後者は、山口拓氏(福島県立博物館)「都市移住者研究の現状と課題について」、吉田律人氏(横浜開港資料館)「戦前の銭湯と経営者の出身地―新潟県西蒲原郡を中

心に―」、羽毛田智幸氏(横浜市歴史博物館)「戦後の『全国浴場銘鑑』の分析について」の各報告、谷口貢氏(二松學舎大学)、服部比呂美氏(國學院大学)の各コメント、総合討議を含めた研究会の記録である。

また、第二部コラム編には、秋野淳一「東京渋谷の企業と宗教―再開発後の神社・都市観光・地域社会を見据えて―」、第三部記録編には、「渋谷定点観測―再開発と渋谷の変化―」を掲載した。

そのほか、渋谷学に係る刊行物として、『都市民俗研究』第二十五号(令和二年二月)を編集・発行した。第二十五号をもって休刊となる同誌には、五本の論考と、第一号から第二十五号までの総目次を収録した。

また、オムニバス形式の学部授業「國學院の学び(渋谷学)」(令和元年度後期)を開講し、「渋谷を科学する」ことをテーマとして、「渋谷学」の研究成果を教育に還元したほか、内部研究会として「松濤研究会」を開発し、國學院大學図書館所蔵「鍋島家松濤事務所旧蔵鍋島家地所関係資料」をはじめ、これまでの研究事業において収集した松濤関係資料等を用いて、松濤地区の形成過程を学際的に検討した。

そのほか、令和元年度第一回渋谷学シンポジウム「地域資源を活かした都市防災へ―渋谷東地区と他地域から考える―」(令和二年二月二十九日)、令和元年度第二回渋谷学シンポジウム「東京渋谷を科学する―渋谷学の蓄積と課題、そして可能性―」(令和二年三月四日)の開催準備を進めていたが、新型コロナウイルス

ウィルス感染症の防止対策として、参加者の健康と安全を考慮し、いずれも開催直前の段階で中止を決定した。これらのシンポジウムについては、時期を見て、改めて開催することを検討している。

本年度の事業計画としては、引き続き当該テーマに関する資料の収集・整理を行うとともに、「渋谷年表(仮)」・「渋谷関係資料目録(仮)」の作成、渋谷定点観測などを実施する予定である。そのほか、本年度もオムニバス形式の学部授業「國學院の学び(渋谷学)」(令和二年度後期)を開講し、研究成果を教育に還元する。

また、「松濤研究会」を継続的に開催し、渋谷の都市形成の観点から松濤地区の資料を検討していく。なお、令和二年度に採択された科学研究費基盤研究(B)「戦前期東京における住宅開発と生活空間の変容―東京府渋谷区を事例に―」(課題番号:20H0315、研究代表者:根岸茂夫)との連携を行いながら、都市空間と生活空間とが共存する渋谷の都市形成過程について、各種資料を基に検討を進めていく予定である。

さらに、平成三十一年度からの三ヶ年計画の最終年度となる本年度は、事業成果報告書の編集・発行を計画している。具体的には、本事業において開催した研究会の記録、渋谷定点観測の成果、「渋谷年表(仮)」、「渋谷関係資料目録(仮)」などを掲載し、本事業における研究成果を地域社会に還元する予定である。

(文責:宮本誉士)

## 古事記学センター 令和二年度事業計画 「古事記学」の推進拠点形成 ―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―

### 事業の目的と概要

本事業は、平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB・世界展開型)に、「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―として本学が選定され、昨年度まで事業支援を受けて進められてきた。本事業は、上述の研究事業の継続として古事記学センターを中心に展開する事業である。

本事業の目的は、本学で皇典講究所の創立以来、継続してきた『古事記』研究を継承・発展し、成果を教育に還元することで、本学が世界と次世代に『古事記』を語り継ぐ独自の拠点となり、新たな文化の創造と発展に寄与することにある。

### 前年度の事業報告

前年度は、五カ年計画の四年目にあたり、特に教育に特化した国際シンポジウム「神話・伝承の教材化と実践―子ども古事記」がひらく世界―を令和元年十月二十六日(土)に開催した。また本シンポジウム後半では、日本神話の読み語りを実践している小山菜美氏(声優・ナレーター)に本学雅楽サークル青葉雅楽会の伴奏のもと「日本神話イザナミ語り」の実演を行っていただいた。また、二月には、本学日本文化研

究所と共催の国際ワークショップ「二十一世紀における国学研究の展開―国際的・学際的な研究発信の可能性を探る―」も開催した。

そのほか、以下の事業を実施した。

- ・外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップ
- ・外部機関・企業と連携した各種イベントの開催
- ・データベースの拡充
- ・『古事記』関連アプリの公開
- ・『古事記』の英訳作成と公開
- ・成果論集『古事記学』第六号刊行
- ・事業成果報告書の作成
- ・個別の事業内容の詳細は、「令和元年度事業報告書」を参照いただきたい。

### 本年度の事業計画

文部科学省による支援期間の見直しが行われ、昨年度が最終年度となったが、大学の特別推進事業として本年度も継続され、申請時の計画に従って事業を推進する。

本年度の目標は、「事業総括と『古事記』の国際共同研究拠点形成」を推進する。具体的な柱は以下の三点である。

- 〈研究〉先端的研究の総括と展望
- 〈教育〉教育実践の展開
- 〈発信〉多言語によるコンテンツの充実

右は、以下に掲げる個別の事業計画を推進することで達成を目指す。

- ① 国際シンポジウムの開催  
研究成果を総括するシンポジウムを開催する。
- ② 外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップの開催  
総括シンポジウムと関連した国際ワークショップを開催する。
- ③ 外部機関・企業と連携した各種イベントの開催  
古事記アートコンテンツや展示を通して、各種団体と連携予定
- ④ 『こども古事記』試用版のWeb公開と試用版に基づく授業実施  
『こども古事記』を活用した授業実践を行い、『こども古事記』の質を向上させる。
- ⑤ 『古事記』入門書の授業導入  
谷口雅博センター長の執筆による『古事記の謎をひもとく』(弘文堂、平成三十年四月刊)を「國學院の学び(古事記を諸分野から読む)」(後期開講)にて用いる。
- ⑥ 博物館連携による関連展示  
本センター作成のデータベースと関連した展示、並びに『日本書紀』と関連した展示を、令和二年度中に行う予定である。
- ⑦ 『古事記』の英訳作成と公開  
本事業の成果論集である『古事記学』に掲載された『古事記』注釈の英訳を、本年度も継続して作成する。
- ⑧ データベースの更新  
前年度まで公開済みの各データベースの補填・更新をおこなう。また「器物」データベースを新規公開する。

⑨ 成果論集『古事記学』第七号刊行  
右の実施計画のうち、発信の柱ともなる博物館展示は、考古資料に焦点を当てた展示を行い、今後本センターの「器物データベース」と連携していく。さらに「器物データベース」は、公開中の「古事記研究データベース」に組み込む。

また過年度より継続して実施している以下の計画も推進する。

- ・ポスドク研究員等の雇用
- ・学内定例研究会の実施
- ・『古事記』関連資料収集とデジタル化
- ・自己点検・評価、外部評価の実施
- ・『古事記』関連レファレンス環境の整備
- ・関連団体と連携した講演等の開催
- ・『古事記』関連の特集展示
- ・『古事記』絵画コンテンツの開催

右計画のうち、「古事記」絵画コンテンツの開催は、第四回古事記アートコンテンツとして大学生(大学院生、専門学校生含む)、高校生(二部門で開催予定(昨年度は両部門で三九四点の応募)。高校生新聞社を窓口とし、令和二年七月一日から作品を募り、日本文化への関心を促す。

### 研究成果の公開について

本事業の研究成果は、学内定例研究会(全六回)において共有されるとともに、シンポジウムやワークショップを通じて広く一般へと還元する。また年度末刊行の成果報告論集『古事記学』第七号(⑨)にも報告予定である。

(文責・渡邊 卓)

## 國學院大學博物館

### 令和二年度事業計画

#### 事業の目的

國學院大學博物館は、建学の精神に基づいた日本文化に関する学術資料を広く調査研究、収集、分類、保管、展示するとともに、学術研究の成果公開・発信を行い、もって研究教育の支援及び社会貢献に資することを目的とし、(Ⅰ) 展示公開、(Ⅱ) 教育普及、(Ⅲ) 環境整備・営繕、(Ⅳ) 運営支援の四つを軸に事業を推進する。

本年度は、前年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策(常設展の整備、多言語化、ミュージアムショップの運営、環境整備)を継続するとともに、二十一世紀研究教育計画(第四次・戦略Ⅰ)に示された「学術資産の活用」「社会貢献・地域連携の強化」を推進し、評価指標達成を目指す。

#### 本年度事業の概要

##### (Ⅰ) 展示公開

本学の学術資産を活用し、研究成果を本学学生・社会に対して公開するため、次の展示を行う。

##### (Ⅰ) 常設展示

- a. 三つの展示室(考古、神道、校史)において、主に研究開発推進機構内の各機関と協働しつつ実施する。
- b. 常時、展示替えを行う。
- c. 展示構成、解説などについて、継続的に改善、変更を行う。

##### (Ⅱ) 特別展・企画展

本学の学術資産、研究成果、学術的・組織的ネットワークを活かしたテーマ性を有する展示を計画・実施する。

##### (Ⅲ) 特集展示等

前述した特別展・企画展と同様の目的と役割を担う小規模な展示を、各展示室やホールで実施する。

##### (Ⅳ) 教育普及

研究開発推進機構を含め、本学の研究成果を本学学生のみならず、広く社会に対しても公開し、もって社会貢献・地域連携の強化を行うため、各展示に関連したミュージアムトーク、講演会などを実施する。

##### (Ⅴ) 環境整備・営繕

空気質・温湿度について、正常な状態を維持するための運用を日常的に行い、更に総合的有害生物管理(IPM)を実施し、外部借用資料を含め、展示・保管資料の保護を行う。

##### (Ⅵ) 運営支援

博物館の情報をホームページやSNS等で随時公開する。更に、ミュージアムショップにおいて、展示図録や本学の研究成果に係る書籍、ミュージアムグッズなどを販売することにより、展示への興味を深めてもらい、来館者の満足度やリピーター率の向上を図る。以上の施策による情報発信、評価や口コミにより、来館者数の増進などを狙う。

#### 実施計画

##### (Ⅰ) 展示公開

##### (Ⅰ) 常設展示

- a. 展示替えを行う。
- b. 展示解説の部分的な変更を行う。

##### (Ⅱ) 特別展・企画展

本年度の特別展・企画展は次の通り(変更の可能性あり)。

##### a. 企画展「モノで読む古事記」

b. 企画展「What SHINTO is.」日本

本の神と祭り」(次年度以降に延期。後述)

c. 特別展「『日本書紀』撰録

1300年」(展示規模を縮小予定)

d. 企画展「神道考古学の祖 大場

磐雄―人と学問―」

e. 企画展「江戸のベストセラ―

『唐詩選』」

f. 企画展「縄文文化のはじまる頃」

(居家以岩陰遺跡発掘調査報告)

(Ⅲ) 特集展示等

特集展示・季節の展示等を各展示

室で実施する。

(Ⅳ) 教育普及

ミュージアムトークを特別展・企

画展毎に実施し、さらに展示に関連

した講演会などを開催し、博物館利

用層の拡大を目指す。

(Ⅴ) 環境整備・営繕

博物館内(展示室や収蔵庫など)

における温湿度維持のための測定

評価と、文化財害虫等の侵入や被害

を防ぐための総合的有害生物管理

(IPM)を行う。更に有害物質放

出量の少ない展示ケースを購入し、

他の団体・機関などが所蔵する国

宝・重要文化財などをより安全に展

示できるようにする。

(Ⅵ) 運営支援

ホームページ・SNSによる情報

発信を推進し、また、来館者アン

ケートや来館者情報の分析を行い、

運営の改善を行う。更に英語による

展示解説の充実と発信、各方面への

広報活動、ミュージアムショップで

の図録や本学・博物館関連商品の販売などを行う。

平成三十一・令和元年度は企画展を六回開催し、年間の総来館者数が六六、七六四人を記録した。

本年度は新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大に伴う緊急事態宣言対応により、臨時休館が続いており、また、完全に終息し正常化するまでに長期的な対策が必要とされていることから、当館の事業においても一部変更を検討している。展示事業では、前述のとおり、企画展「What SHINTO is.」を延期し、他の企画展も規模の縮小等の見直しが行われている。

また休業期間中の展示観覧に代わる取り組みとして、「おうちミュージアム」に参加し、SNS上で楽しめる内容を発信。この他、常設展及び企画展をネット上で観覧できるオンラインミュージアムを配信する予定である。なおオンライン展示は新型コロナウイルス終息後においても継続的に取り組む事業に発展させる。

宣言解除後は、感染防止策として、勤務者や来館者の衛生面の管理を行い、館内の展示環境も工夫する予定である。

(文責・國學院大學博物館)

## 令和2年度 國學院大學 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧(事業別)

◇新規研究事業

\* 研究事業代表者

令和2年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼担教員	客員研究員	ポストク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信 (R1~3年度)	* 平藤喜久子 星野靖二 吉永博彰	黒崎浩行 シッケタンツ, エリック 藤澤 紫	キロス, イグナシオ	高田 彩 丹羽宣子	大場あや 宮澤安紀	井上順孝 櫻井義秀 土屋 博 ナカイ, ケイト ヘイヴンズ, ノルマン 山中 弘	天田顕徳 今井信治 牧野元紀 フレデリック カドー, イヴ 塚田穂高 野口生也
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築 (H30~R2年度)	武田幸也	* 遠藤 潤 松本久史		河合一樹 高田 彩	木村悠之介	林 淳	井関大介 一戸 渉 今井功一 荻原 稔 小田真裕 小平美香
学術資料センター	◇博物館収蔵品の資料化とデジタル公開に関する研究 (R2~4年度)	内川隆志 深澤太郎	青木 敬 小川直之 大日方一郎 * 黒崎浩行 笹生 衛 谷口康浩 吉田敏弘	阿部常樹 菊地大樹 鳥越多工摩	川嶋麗華	松本耕作		荒井祐介 石井 匠 石川岳祐 伊藤大祐 植田 真 奥山 香 加藤元康 北澤宏明 栗木 崇
	◇神道関連資料の整理分析と神道史の再検討 (R2~4年度)	大東敬明 吉永博彰	* 加瀬直弥 笹生 衛 鈴木聡子		木村大樹		岡田莊司	水谷 類
校史・学術資産研究センター	◇國學院大學における自校史研究とアーカイブの活用 (R2~4年度)	渡邊 卓 大東敬明 高野裕基	* 齊藤智朗 根岸茂夫 藤田大誠	田中 潤	大番彩香	齊藤みのり	阪本是丸	
	國學院大學における学術資産研究の可視化 (H30~R2年度)	渡邊 卓 大東敬明 高野裕基	* 加瀬直弥 笹生 衛 根岸茂夫 野中哲照 藤田大誠 矢部健太郎	荒木優也 高見澤美紀	比企貴之			遠藤珠紀 金子 拓
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業	宮本誉士 梅川智也 大東敬明 楓 千里 渡邊 卓 下村彰男 武田幸也 米田誠司 高野裕基 石山千代 半田竜介 清野 隆 見玉千絵	岩瀬由佳 遠藤 潤 太田直之 加瀬直弥 黒澤直道 佐藤長門 菅 浩二 * 武田秀章 谷口雅博 西岡和彦 西村幸夫	藤田大誠 藤本頼生 松本久史	小山田江津子 神杉靖嗣	大貫大樹	阪本是丸 古沢広祐	網谷哲成 河村忠伸 黒岩昭彦 康 成文 小林威朗 坂井久能 佐藤一伯 重村光輝 大丸真美 高原光啓 津田 勉
	國學院大學21世紀研究教育計画委員会研究事業「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」(H30~R2年度)	宮本誉士 武田幸也 半田竜介	* 武田秀章		秋野淳一		伊藤新之輔	上山和雄
國學院大學博物館		内川隆志 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓 吉永博彰 高野裕基	* 笹生 衛				朱 岩石 福尾正彦 古谷 毅 茂木雅博 柳田康雄	粕谷 崇 中村耕作 安高啓明
古事記学センター	私立大学研究ブランディング事業(平成28年度採択) 「古事記学」の推進拠点形成-世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信-	平藤喜久子 渡邊 卓 武田幸也	青木 敬 岩瀬由佳 遠藤 潤 太田直之 黒澤直道 齊藤智朗 笹生 衛 佐藤長門	武田秀章 * 谷口雅博 西岡和彦 藤澤 紫 藤田大誠 藤本頼生 松本久史	井上隼人 小野諒巳 キロス, イグナシオ 曹 咏梅	鶉橋辰成 高橋俊之		中村 大 バウシュ, イロナ 山本哲也

## 令和2年度 國學院大學 研究開発推進機構 人事一覽

機構長	武田秀章									
日本文化研究所長	平藤喜久子									
学術資料センター長	笹生 衛									
校史・学術資産研究センター長	根岸茂夫									
研究開発推進センター長	武田秀章									
國學院大學博物館長	笹生 衛									
國學院大學博物館副館長	内川隆志 及川 聡									
専任教員	教授	内川隆志 梅川智也 楓 千里 下村彰男 平藤喜久子 米田誠司								
	准教授	石山千代 清野 隆 大東敬明 深澤太郎 星野靖二 宮本誉士 渡邊 卓								
	助教	児玉千絵 武田幸也 吉永博彰								
	助教 (特別専任)	高野裕基 半田竜介								
兼任教員	教授	青木 敬 岩瀬由佳 遠藤 潤 太田直之 小川直之 黒崎浩行 黒澤直道 齊藤智朗 笹生 衛 佐藤長門 菅 浩二 武田秀章 谷口雅博 谷口康浩 西岡和彦 西村幸夫 根岸茂夫 野中哲照 藤澤 紫 藤田大誠 松本久史 矢部健太郎 吉田敏弘								
	准教授	加瀬直弥 藤本頼生								
	助教	シッケタンツ, エリック 鈴木聡子								
	助手	大日方一郎								
研究員	客員研究員	秋野淳一 阿部常樹 荒木優也 井上隼人 小野諒己 小山田江津子 神杉靖嗣 菊地大樹 キロス, イグナシオ 曹 咏梅 高見澤美紀 田中 潤 鳥越多工摩								
	ポストク研究員	鶉橋辰成 大番彩香 河合一樹 川嶋麗華 木村大樹 高田 彩 高橋俊之 丹羽宣子 比企貴之								
	研究補助員	伊藤新之輔 大貫大樹 大場あや 木村悠之介 齊藤みのり 松本耕作 宮澤安紀								
客員教授	井上順孝 上山和雄 岡田莊司 阪本是丸 櫻井義秀 朱 岩石 土屋 博 ナカイ, ケイト 林 淳 福尾正彦 古沢広祐 古谷 毅 ヘイヴンズ, ノルマン 茂木雅博 柳田康雄 山中 弘									
共同研究員	天田顕徳 網谷哲成 荒井祐介 石井 匠 石川岳彦 井関大介 一戸 渉 伊藤大祐 今井功一 今井信治 今泉宜子 植田 真 遠藤珠紀 荻原 稔 奥山 香 小田真裕 小平美香 ガイタニデイス, ヤニス 粕谷 崇 加藤元康 カド-, イヴ 金子 拓 河村忠伸 北澤宏明 栗木 崇 黒岩昭彦 黒田迪子 康 成文 小林威朗 惟村志志 齋藤しおり 坂井久能 佐藤一伯 重村光輝 芹口真結子 大工原豊 大丸真美 高原光啓 高久 舞 田口哲也 塚田穂高 津田 勉 間芝志保 東郷茂彦 戸浪裕之 中野裕三 中村 大 中村耕作 西俣先子 野口生也 野田安平 野藤 妙 パウシュ, イローナ 原田雄斗 ビュテル, ジャン=ミシェル 平本謙一郎 冬月 律 古畑侑亮 フレーレ, カール 牧野元紀 水谷 類 三ツ松誠 宮澤佳廣 村上 晶 森 悟朗 矢崎早枝子 安高啓明 山口 晃 山本哲也 吉田扶希子 吉田律人 吉野 裕									

## 令和2年度 事務局人事

学術メディアセンター事務部長	及川 聡
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構・図書館担当部長	山口輝幸
学術メディアセンター事務部情報システム担当部長	堀内弘行
学術メディアセンター事務部情報システム課長	後藤幸雄
学術メディアセンター事務部図書館事務課長	澤井 隆
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課長	飯塚陽子
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課 國學院大學博物館担当	藤井哲彦 小林 香 小平浩衣 相川由起 平川 大 志水志保 三島隆 網谷哲成 (学芸員) 佐々木理良 (学芸員) 尾上周平 (学芸員)

# 彙報

## 会議

### ○全体

- ・令和元年度第五回運営委員会、令和二年二月二十日(木) 十五時五十分～十六時二十分、若木タワー四階会議室○五
- ・令和元年度第六回企画委員会、令和二年三月十日(火) 十一時～十二時、AMC棟五階会議室○六
- ・令和元年度第三回人事委員会、令和二年一月十五日(水) 九時四十五分～十時十五分、AMC棟五階プロジェクトルーム二
- ・令和元年度第四回人事委員会、令和二年二月十九日(水) 十二時十分～十二時四十分、AMC棟五階プロジェクトルーム二
- ・令和元年度第二回教員等資格審査委員会、令和二年一月十五日(水) 十五時～十五時三十分、AMC棟五階プロジェクトルーム二
- ・令和二年度第一回企画委員会、令和二年五月十三日(水)、メール審議

### ○日本文化研究所

- ・令和元年度第六回所員会議、令和二年三月三日(火) 十一時～十二時、AMC棟五階会議室○六

- 國學院大學博物館
  - ・令和二年度第一回國學院大學博物館会議、令和二年五月二十日(水) 十時三十分～十時四十五分、オンライン会議システム

### ○古事記学センター

- ・令和元年度第三回古事記学研究実施委員会、令和二年二月二十日(木) 十六時二十分～十六時四十分、若木タワー四階会議室○五

- 公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

### ○日本文化研究所

- ・国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」、令和二年二月八日(土) 十時～十七時三十分、AMC棟一階常磐松ホール、報告者Ⅱベテイナー・グラムリヒⅡオカ(上智大学教授)、蔣建偉(中国・中山大学PD研究員)、裴寛紋(韓国・KAIST教授)、ジョン・R・ベンテリー(米国・北イリノイ大学教授)、松本久史(國學院大學教授)、コメンテーターⅡ一戸涉(慶應義塾大学准教授)、桐原健真(金城学院大学教授)、林淳(愛知学院大学教授)、司会Ⅱ遠藤潤(國學院大學教授)

- ・令和元年度第二回国学研究プラットフォーム公開レクチャー「古典注釈学と国学―賀茂真淵を中心として―」、令和二年二月十三日(木) 十八時三十分～二十時、AMC棟五階会議室○六、講師Ⅱ高野奈未(日本大学准教授)
- ・令和元年度第三回国学研究プラットフォーム公開レクチャー「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」、令和二年二月二十日(木) 十八時三十分～二十時、AMC棟五階会議室○六、講師Ⅱ伊藤聡(茨城大学教授)
- ・令和元年度第三回宗教文化教育に関する研究会、令和二年二月二十九日(土) 十二時～十七時三十分、AMC棟五階会議室○六、発表者Ⅱ井上順孝(國學院大學名誉教授)、櫻井義秀(北海道大学教授)、山中弘(日本文化研究所客員教授)、木村敏明(東北大学教授)、飯嶋秀治(九州大学教授)

- 研究開発推進センター
  - ・令和元年度共存学シンポジウム「『グローバル』世界のビジョンを探る―『共存社会』の構築に向けて」、令和二年二月十八日(火) 十三時三十分～十七時三十分、若木タワー地下一階会議室○二、報告者Ⅱ古沢広祐(國學院大學教授)、ヘイヴンズ・ノルマン(國學院大學教授)、茂木栄(國學院大學教授)、コメンテーターⅡ木村武史(筑波大学教授)、濱田陽(帝京大学教授)、パネリストⅡ菅浩二(國學院大學教授)、荻田真司(國學院大學教授)、笠間直穂子(國學院大學准教授)、司会進行Ⅱ松本久史(國學院大學教授)

- 日本文化研究所
  - ・齋藤公太・小田真裕・鈴木健多郎、「國學院大學国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築―事業の一環としての資料調査のため、令和二年二月四日(火)～二月五日(水)、岐阜県各務原市

## 出張

### ○日本文化研究所

- ・深澤太郎・藤原正大、「奈良県奈良市山村廢寺出土資料調査と現地踏査」のため、令和二年二月二十四日(月)～二月二十五日(火)、奈良県奈良市
- ・深澤太郎、「中近世信仰資料の調査及び旧円光院資料の寄託に関する協議」のため、令和二年三月八日(日)～三月九日(月)、静岡県熱海市

### ○学術資料センター

- ・大東敬明・渡邊卓、「熱田本『日本書紀』調査」のため、令和二年一月十九日(日)、愛知県名古屋市内
- ・渡邊卓・吉永博彰、「令和二年度特別展にかかる資料借用に関する打ち合わせ」のため、令和二年三月五日(木)～三月六日(金)、静岡県三島市
- ・内川隆志、「堺市博物館、関西大学博物館及び図書館所蔵資料等の返却」のため、令和二年三月十八日(水)～十九日(木)、大阪府堺市・吹田市

### ○國學院大學博物館

- ・令和元年度第二回国学研究プラットフォーム公開レクチャー「古典注釈学と国学―賀茂真淵を中心として―」、令和二年二月十三日(木) 十八時三十分～二十時、AMC棟五階会議室○六

- ・令和元年度第三回国学研究プラットフォーム公開レクチャー「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」、令和二年二月二十日(木) 十八時三十分～二十時、AMC棟五階会議室○六

- ・令和元年度第三回宗教文化教育に関する研究会、令和二年二月二十九日(土) 十二時～十七時三十分、AMC棟五階会議室○六

- ・令和元年度第三回古事記学研究実施委員会、令和二年二月二十日(木) 十六時二十分～十六時四十分、若木タワー四階会議室○五

・内川隆志、「長岡市立中央図書館所蔵資料等の返却」のため、令和二年三月二十四日(火)、新潟県長岡市

#### ○古事記学センター

・根岸茂夫・松本久史・渡邊卓、「近世期『古事記』荷田春満関連資料調査」のため、令和二年二月十日(月)二月十一日(火)、東丸神社(京都府京都市)

#### 刊行物

#### ○全体

・研究開発推進機構『機構ニュース』通号二十六(令和二年二月二十五日発行)

・研究開発推進機構『國學院大學研究開発推進機構紀要』第十二号(令和二年三月三十一日発行)

#### ○日本文化研究所

・日本文化研究所『日本文化研究所年報』第十二号(令和元年九月三十日発行)

・日本文化研究所『*Kokugakuin Japan Studies*』Vol.1(令和二年二月発行 ※オンラインジャーナル)

・日本文化研究所『*Religious Cultures in Asia: Mutual Transformations through Multiple Modernities*』(令和二年二月発行 ※平成三十年年度国際研究フォーラム報告書)

#### ○研究開発推進センター

・研究開発推進センター『研究開発

推進センター研究紀要』第十四号(令和二年三月十日発行)

・研究開発推進センター『ブックレット渋谷学02』(令和二年二月二十八日発行)

・都市民俗学研究会(研究開発推進センター内)『都市民俗研究』第二十五号(令和二年二月二十九日発行)

・研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『近代の神道と社会』(令和二年二月十二日発行、弘文堂)

#### ○学術資料センター

・学術資料センター(神道資料館部門)『四季の祭りと神道の歴史』(令和二年二月二十八日発行)

・学術資料センター(考古学資料館部門)『文化財の活用とは何か』(令和二年三月十五日発行、六一書房)

#### ○校史・学術資産研究センター

・校史・学術資産研究センター『國學院大學 校史・学術資産研究』第十二号(令和二年三月六日発行)

・校史・学術資産研究センター『校史』第三十号(令和二年三月六日発行)

#### ○國學院大學博物館

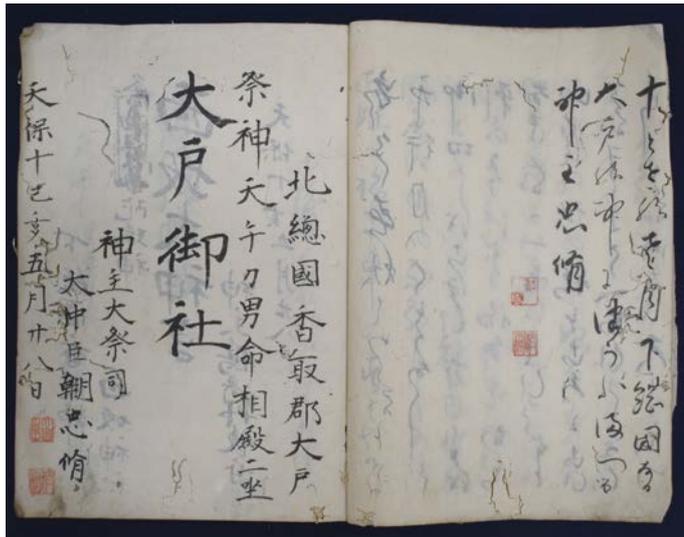
・國學院大學博物館『國學院大學博物館研究報告』第三十六輯(令和二年二月二十九日発行)

#### ○古事記学センター

・國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業・文部科学省私立大学研究ブランディング事業成果報告論集『古事記学』第六号(令和二年三月十日発行)

### 資料紹介 『御社拝記』

本資料は、「御社(神社)」の参拝に関する江戸時代後期の記録である。神号(祭神名)・社号(神社名)を中心とした墨書や押印等が、参拝した神社ごとに授与されており、現代では「御朱印帳」の名称で広く知られるものに相当する。縦二七・八センチメートル、横二〇センチメートル、全五四丁で、美濃判と呼ばれる紙を二つ折りにしたと考えられる。今日では持ち歩きの利便性から、B6判より小型のものが普及しているのに対し、その倍以上の大きさであったことが見て取れよう。



右：序文の末尾、左：大戸社から始まる神社参拝記録



右：津島牛頭天王(現、津島神社・愛知県津島市)  
左：伊勢両宮(現、神宮・皇大神宮と豊受大神宮)

山市)を拝する。そこから東へと引き返し、播磨国を抜けて山城国に至った。以降は東海道の沿って、美濃↓尾張↓三河↓遠江↓駿河国を進んだとわかる。ところが、備前国より東に引き返して二十日後の七月二十七日、「浅間大

『御社拝記』は序文に、敬神の念が篤い「木内左源太正雄」なる人物が「国々乃御社」に幣帛を捧げ、また「皇神(貴い神の意)」の御名を乞い求めることを思い立ったとある。よって本書は、木内正雄が各地の神社を参拝し、その神号・社号を記してもらった一冊と推察される。序文に続き、本資料には八八社に及ぶ神社参拝の記録が四四丁半にわたって載せられており、江戸後期の神社参詣の旅の軌跡をたどることができる。なお、旅の起点とされたのは下総国の大戸社(現、大戸神社)・

千葉県香取市)であり、始まりは天保十(一八三九)年五月二十八日のことであった。以下、旅の概要を示すと、次の通りである。  
冒頭の大戸社に続き、正雄は香取神宮や鹿島神宮、息栖社など、下総国内や近隣の常陸国の神社を拝して回り、翌六月初旬に江戸へ入る。その後は甲州街道を西進して武蔵国を抜け、甲斐・信濃国へと向かい、同月半ばに木曾に至った。そこから尾張国を経て、同月二十三日には伊勢国の両宮(内宮と外宮、現在の伊勢の神宮)を参拝するに及ぶ。  
神社参詣の旅は神宮参拝後も続き、北上すると伊賀国を経て西に向かい、南都(現、奈良市)↓河内↓摂津の諸国内の神社を参詣。七月七日には備前国一宮の吉備津彦神社

神社」(現、静岡浅間神社・静岡県静岡市)を最後に、白紙を六丁ばかり残して参拝の記録は終わる。その後の足取りは定かではない。以上が、本書にみた参拝の行程である。  
ところで、神社から授与されるこうした墨書・押印等について、所載の神社により表記に若干の差異こそあるが、概ね書式(筆記項目)は共通していたように見受けられる。中央には大字で神号・社号を配し、その右側には鎮座地や神格・社格を、また左側には応対した筆記者と日付を記すという形である。これは、現在広くみられる「御朱印帳」の表記にも凡そ通じる形であろう。  
一方で、冒頭の大戸社のように神号・社号に朱印を押ししていない神社もあり、この点から本書を今日の「御朱印帳」に相当するものとした。  
なお、参拝者の応対に当たる筆記者が署名や押印している点は、現在とは異なるところであり、近世の神社参拝記録の大きな特徴といえる。筆記者名については、神職個人の職・氏名が筆書されたものがある一方で、神社によっては「役所」ほか「役人」や「執事」「侍史」から「当番」まで、各社の神社内組織の実態を反映し、様々な表記がみられる。  
以上のような点から、『御社拝記』は現在広く普及する「御朱印帳」の成立過程がうかがえる資料であると同時に、参拝者に応対した近世神社の実態・様相の一部を見て取ることができるところでも、有用な資料であると考えられよう。

(文責・吉永博彰)